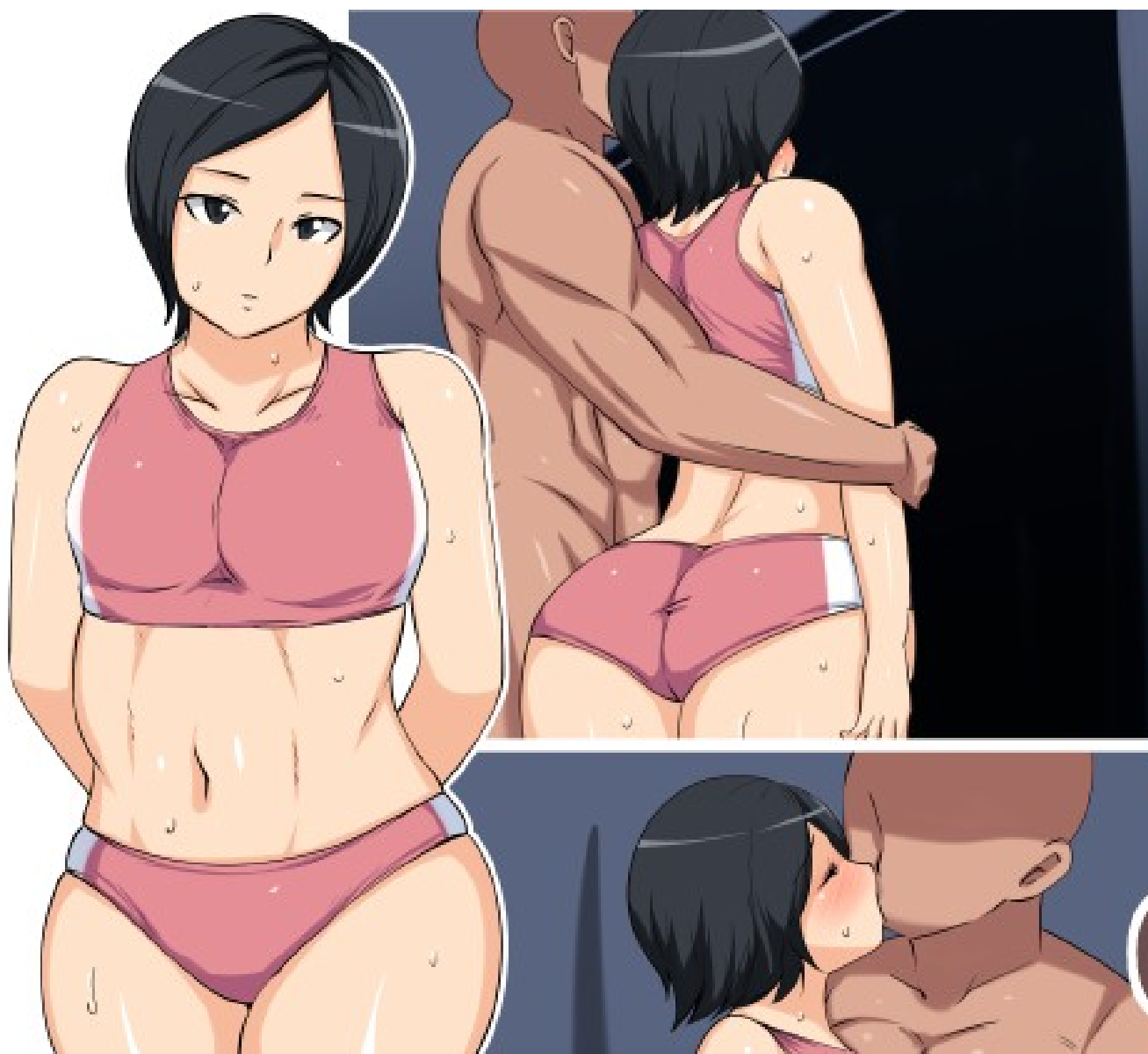


# 陸上部員の話。

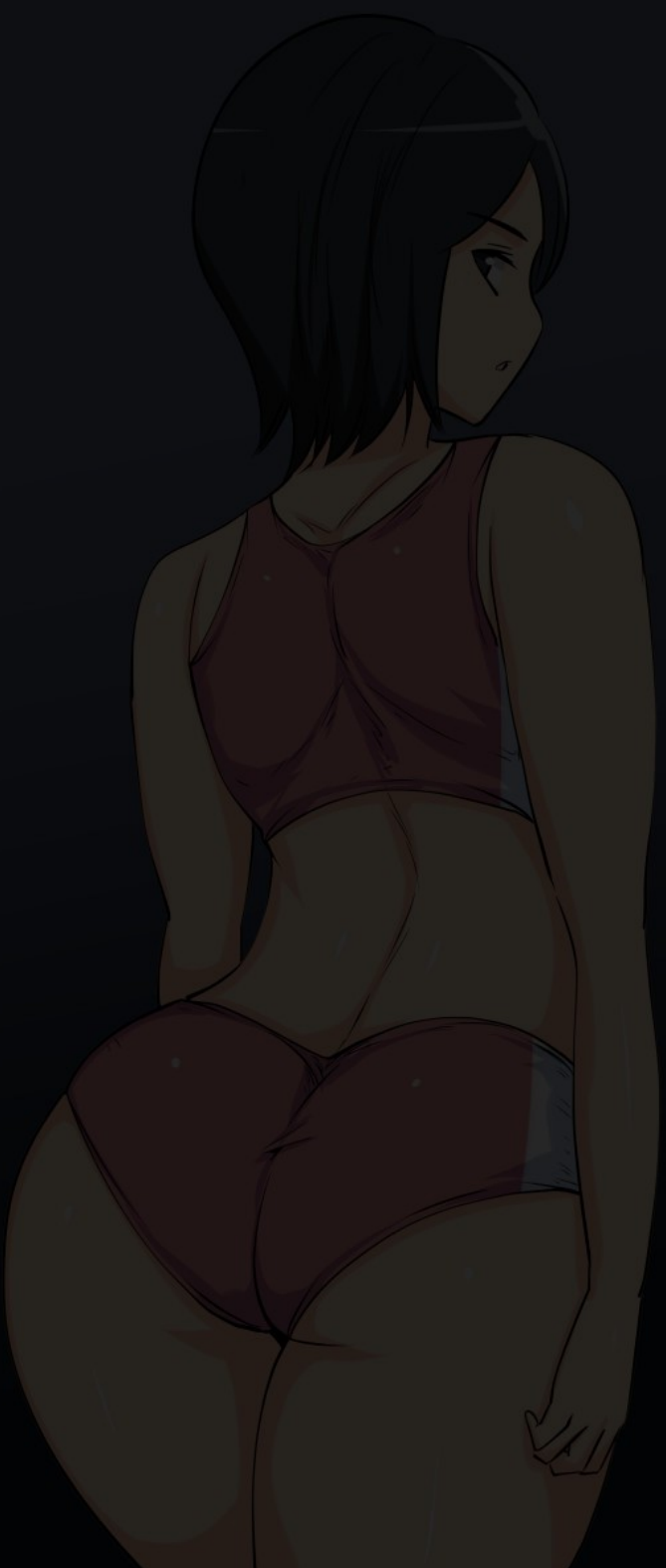
基本CG10枚差分45枚

400円

do



# 陸上部員の話。



陸上部員の彼女。そんな彼女の前に、  
卒業生、元陸上部のOBが現れた。

練習が終わって、帰ろうとすると、一人の男が話しかけてきた。

「やあ、君、陸上部の子だね。」



「そうですけど、どちら様ですか？」

ム4♡

「僕はこの学校で陸上部だった○○。」



「○○さん、○○？知ってます。  
大会ですごい成績を収めた先輩がいたって  
聞いたことがありますけど、あなただったんですか？」



「そうなんだ。で、今日、君の練習を見させてもらっただけど、まだまだ伸びしろがあるように見えてね。でも、練習方法を間違えている間は伸びないと思うんだ。」



「練習方法が間違っている……？  
どういうことですか？」

「うーん、ちよつと説明しにくいな、君が本当に  
もつといい成績を出したいと思つて、僕を信じてくれるならば  
教えてあげてもいいんだけど。」



正直なところ、確かに彼女は伸び悩んでいた。  
どれだけ練習をやっても思うような成績が出せず、自分の力の限界を  
感じていたのだ。

「あの、先輩、お願いします。私に指導して頂けませんか？」



「それは構わないけど、僕のこと、信じてくれるか？」

い  
4

「も、もちろんです。なんでも言うこと聞きますから。  
お願いします。」



「そうか、わかった。ありがとう信じてくれて。」

い  
4



こうして彼女は男にコーチを受けることにした。  
だが、男の目的は当然、指導などではなかった。



この練習によって鍛えられ、ムチムチな肉体を  
食りたい、弄びたいだけだった。



「それじゃあ、始めようか。」

「はい、え？あ、あの、先輩、ど、どうして裸、なんですか？」

男は気が付いたら全裸になり、彼女に手をかけていた。。。。



「いや、君に足りないのは経験だと思ってね……。  
恥ずかしさや緊張で実力が出せないことがあったんじゃないかな？  
それから脱却するために、まずは僕が恥ずかしい姿になれば、少しは  
緊張が取れるんじゃないかと思ってね……。」

「そ、そうなんですか……。？確かに緊張はします……。」

「適当な言い分だが、結果が出せずにいる彼女には、  
信じる以外はなかった。」





ははははは

ドゥ

「はいはい。」

「んんん！？んんん？？？」

男が次に行ったのは、キス。唇を合わせ、彼女の緊張や恥ずかしさを一気に引き上げた。













キスをされた彼女はふらふらになり、男に抱きかかえられ、部屋に連れ込まれようとしていた。



『どうした？大丈夫かい？』

『わ、わかりません……恥ずかしすぎて……』

どっ、

どっ、

ヒュ

ハッ

ハッ

「ふふ、可愛いなあ。そんなことを  
言われると、もっと恥ずかしいことをしたく  
なってしまうじゃないか。」



「それでもあの先輩、これからどうするの？」

ハッ

どう？

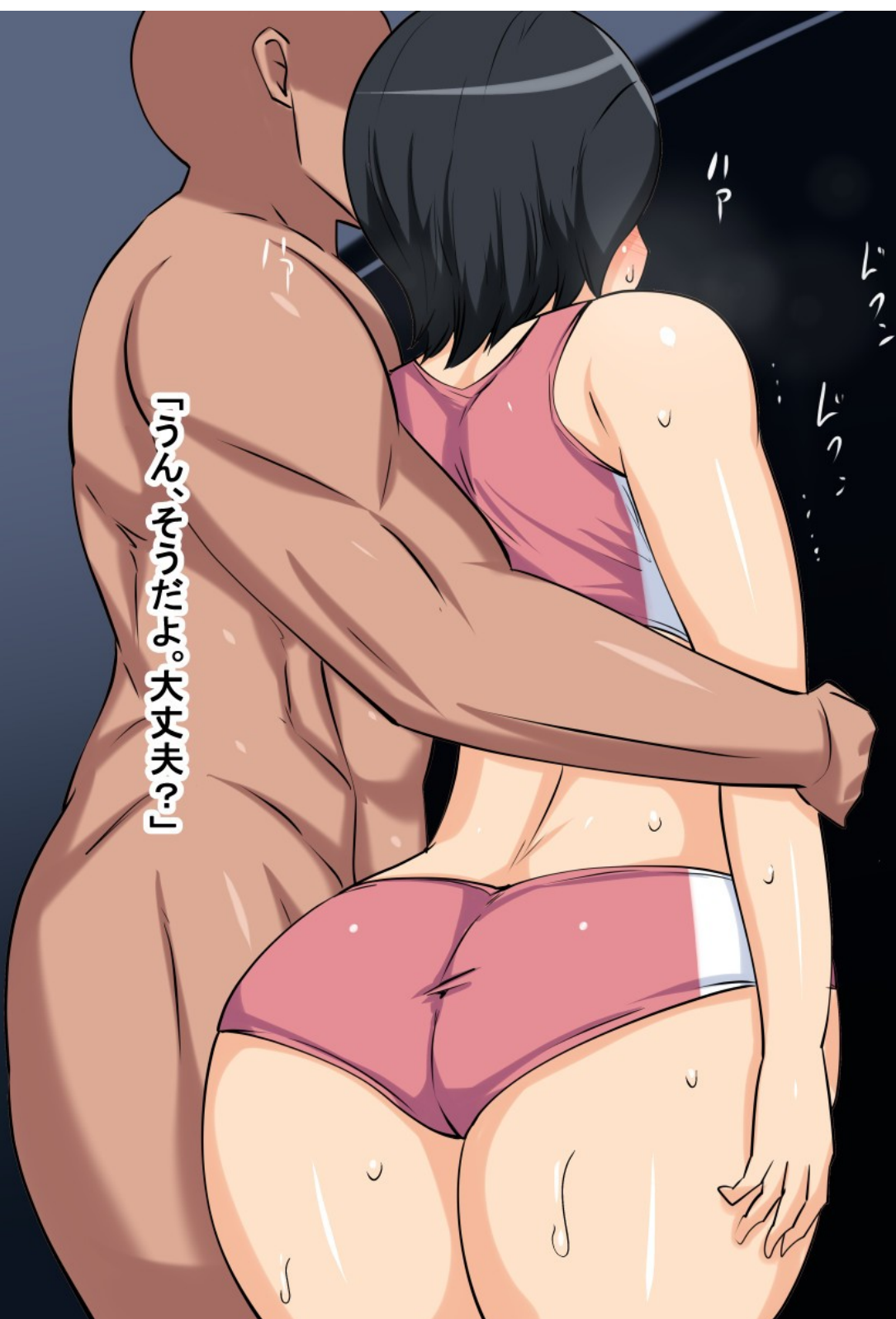
どう？

「ああ、ベッドのある部屋で、君のことをマッサージしてあげようと思ってね。もちろん恥ずかしいこともするよ。」





「は、恥ずかしいこと、まだするんですか……？」



「うん、そうだよ。大丈夫？」

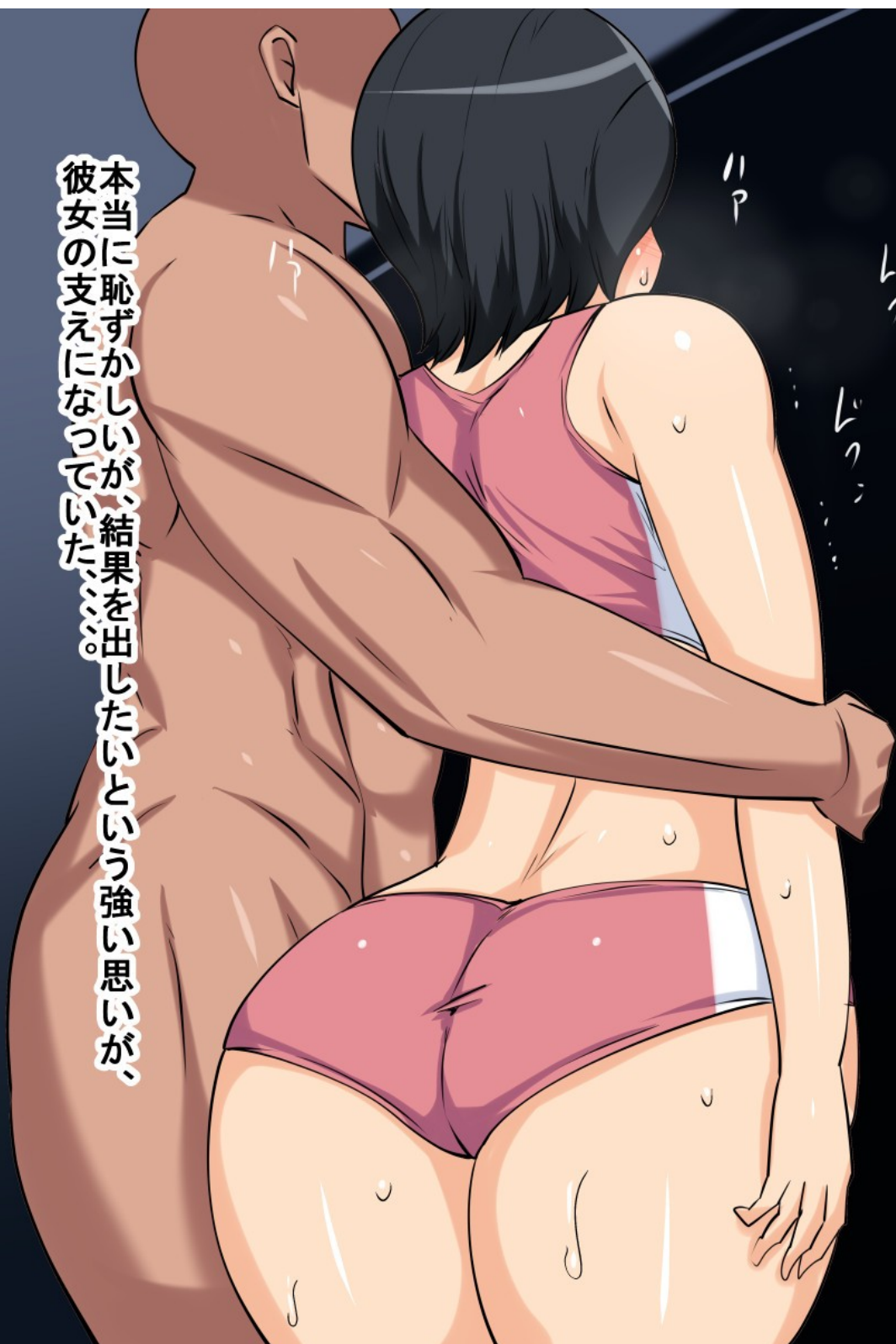
『はい、頑張ります。』

ハッ

どっ、

どっ、

本当に恥ずかしいが、結果を出したいという強い思いが、  
彼女の支えになっていた。



h  
D

2





「あ、あの、先輩、な、何を、、、、？」

「ん？これかい？さつきよりも  
恥ずかしいだろう？  
男のものが布一枚で君のあそこに  
当たっているんだからな。」



「は、はい、です。いいえ、  
恥ずかしいです。」

「そうか、そうだろうな。  
ああ、それにしても、  
気持ち良すぎる、  
ごめんね、ちよつと  
出してしまっ、  
!!!」

「え、……？」







「ふふふ♡ふふふ♡♡」

「ふふふ」

「ふふふ」

「ふう、気持ちよかったよ。  
君もだいぶ恥ずかしさに  
慣れてきたんじゃないかな、？」



「わ、わかりません、ずっと  
恥ずかしいから。」

「そうか、でも、今度することは  
すごい恥ずかしいことだから、  
これさえ乗り越えられれば、きっと  
すごい記録を出せるようになる  
と思うよ。」



「んっっっっ♡せっっ先輩っっお尻っっっっ。」

びくっ

んっ♡

ちゅー

「ふふっいいお尻をしてるからねっっつい  
掴んでしまったよっっ。」





「それじゃあ、次は、セックスをしようか。」

「え……？セ……？セ……？」

「何を驚いているんだい？おおよそ見当はついていただろう？セックスもするだろうと。」

「い、いや、そんなこと、だめです、できません……。」



「なんだ、君は知らないのか？セックスをすることで体が気持ちよくなり、より運動に適した体になるんだ。」

「い、いや、そんな、でも、急すぎて、、、私、、、。」

「大丈夫、優しくしてあげるから。」





「君はいい成績を出したいんだらう？それとも  
その言葉は嘘なのかな？」





「~~~~~わ~~~~~わかりました。~~~~~  
「。。。お願いします。。。」





こうして、彼女は男に抱かれた♡♡♡♡♡

「あっ♡♡♡んあっ♡♡♡  
あああっ♡♡♡んはあっ♡♡♡」



# h

「んっ♡んっ♡んあっ♡ああっ♡  
だ、大丈夫ですききす♡♡」

「そうか、それはよかった、  
もっと気持ちよくして  
あげるからね。」











「ふっ、これでだいぶ良くなったからな。  
一日だけじゃ足りないからな。また  
するぞ。」

「あゝはいはい、わかりました。」





それからしばらくして……

「どうだい？記録会の方は、  
いい結果が出たのかな？」

「は、はい、自分でも驚くような  
成績が残せました。だから、  
またご指導お願いします。♡」

ザン……

ムム

ムム



それからしばらくして、記録会があったが、  
自分でも驚くような素晴らしい成績を  
残すことができた。男自身は自分の  
性欲を満たすためだったが、結果が  
出たことで、男の言うことを信じ込んで  
しまうのは当然なのかもしれない。

い  
き

い  
き





「そうか、こんなにも早く結果が出るとは僕も思わなかつたよ。じゃあ、これからもつといい結果が出るように、色々教えてあげるね。」

「は、はい。お願いします。♡♡」

い  
ち

い  
ち





「またこの肉体を味わえるなんてな。本当にありがたい話だ。こうなればこの子にはもつといい結果を出してもらって抱かせてもらわないとな。」

男は、心の中で自分の欲望を叶えるために、さらに彼女を利用することを決めた。

い  
ち

い  
ち





『んっ♡んっ♡んあっ♡ああっ♡  
ああっ♡♡あん♡♡んんっ♡♡』



「せ、先輩、♡♡♡これで私、♡♡も、もっと強くなれますよね♡♡♡」

「あ、ああ、なれるとも♡♡だから、僕を信じて、体を預けて♡♡♡」

「は、はい♡♡♡信じてます、♡♡♡」











「先輩、ありがとうございますっ♡」

「これからももっと♡指導、  
お願いしますっ♡♡」

それからというもの、彼女の成績は右肩上がり、  
伸び続けていった。

「先輩、ありがとうございますっ♡」

「これからももっと♡指導、  
お願いしますっ♡♡」

それからというもの、彼女の成績は右肩上がり  
で伸び続けていった。

「先輩、ありがとうございますっ♡」

「これからももっと♡指導、  
お願いしますっ♡♡」

それからというもの、彼女の成績は右肩上がり  
伸び続けていった。



この度は当作品をご購入くださり、ありがとうございます。

少し空白期間ができてしまったため、描き慣れるために  
陸上部員の話を描きました。はたして陸上関連は何作品目  
なるのでしょうか。現在、他にも作品や習作を販売、  
公開できるように場所を探しております。もし別の場所でも  
活動するようになりましたらばお知らせできればと。よろしく  
お願いします。

S

※当サークルの全作品の無断転載（購入されてない方が閲覧できるようにする）  
等の行為はご遠慮願います。ご協力の程、よろしくお願いします。